

『百万の夢』って？

NPO法人 日立太陽の家

理事長 小又克也

長野県の北部、山中の小谷村というところに共働学舎があります。

一九七三年に第一歩を踏み出したここは、いろいろなハンディーを持った方々が共に働き生活をする場で、豊かな自然の中で手作りの生活を営んでいる「ミニユニティー」です。

日本海まで一時間、北アルプスの裾を流れる姫川沿いの山里。六人で始め、現在では約四〇人がふたつの集団に分かれて標高七〇メートルから九〇メートルの間に点在して暮らしています。

立屋というところにある母屋を中心にして、幾つかの建物に分かれて暮らしていて、米・野菜類を作付けし、牛・山羊・鶏などの動物飼育、それに味噌・パンなどの製造と、出来る限り作れる物は作る努力をしているところです。また農業は手作業を基本とし、肥料も微生物農法で山土を主体とする発酵肥料を自分達で作り、家畜糞から堆肥を作ってよい土をふやす農業を心がけています。

冬は、例年では二メートル以上の雪が積もり、夏の間には草木染めや本藍染めをした糸を使用して機織りをし、栽培したとうもろこしの皮を使用した人形作りや、木製おもちゃ等を作り暮らしています。

縁があって、四〇年ほど前に太陽の家の職員研修として、ここで二泊の共働生活をさせてもらいました。最寄りの駅から二時間かけて山道を歩いたことを覚えています。どのようなことをして過ごしたのか記憶はおぼろげですが、ひとつだけ鮮明に覚えていること。それは、施設内の食堂に掲げられていた一枚のプレート。そこには次のように書かれていました。

『That low man goes on adding one to one.

His hundred's soon hit : This high man aiming at a million. Misses an unit.』

施設長に意味をたずねたところ、

『愚かなる者は百の夢を見てひとつひとつ獲得する。賢き者は百万の夢を見てひとつも獲得しない。』とのこと。

理解ができないまま、『あゝは自分で考えようぞ。』と。

あの日から四〇年、自分なりの答えを見つけたかもしれないと思い、先日二度目の訪問をさせてもらいました。

この時もその地は前回同様に心地よい空気に包まれていて、そしてこの空気は太陽の家の空気と同じものだとも感じながら、更に肝心の『百万の夢』とは何なのか・・・この答えにはまだまだたどり着けないと思いながら帰路につきました。この記録はそのときのことをただ思いつくままに書いたものです。